過負荷　魔法　崩壊

音神蓮馬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過負荷　魔法　崩壊

【Nコード】

N8632U

【作者名】

音神蓮馬

【あらすじ】

少女たちは壊れた少年に出会う。
少女たちは少年の手によって壊れていく。
これは壊れた少年と壊れていく少女たちの物語。
※性格改変ものです。
苦手な方はお戻りください。

プロローグ（前書き）

初投稿　なのはの性格改変回

プロローグ

夕方、この時間だと子供は帰ってしまう時間だ。
しかし少女は一人公園で下を見ながらブランコにのっていた。
そこに一人の少年が通りかかり、少女の存在に気がつき、声をかけた。

「もう夕方だよ。帰らないの？」

少女は俯いたまま答える。

「家にいても皆忙しいの。なのはいい子だからここで待ってなきゃいけないの。」

そう答えた少女に少年は予想外の言葉を返す

「なんでいい子でいるんだい？」

「えっ？」

「実は遊びたいんじゃないの？そんな言いつけ守ってないでやりたい事したらいいじゃない。」

「・・・でも、やっぱりいい子でいなきゃ。お母さんを困らせちゃうの。」

「だからさ、いい子ぶっていないで思ってること言っちゃえば？」

「え・・・でも・・・」

少年は声のトーンを少し落とし続ける。

「本当は憎いんだろう？君を一人にした人達が。　君を遊ばせないで拘束している人達が。」

「憎い・・・なのはを一人にした人達が・・・」

少年は少女の肩に手を置いた。

カチッ。

少女の中の何かが外れた。

「憎い。　なのはを一人にしたお父さんが憎い。　なのはを遊ばせないお母さんが憎い。　なのはを怖がらせるお兄ちゃんが憎い。　なのはを無視するお姉ちゃんが憎い。　憎い憎い憎い憎い

憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い
憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い
憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎

い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎
い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎
い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い

憎い憎い憎い憎い憎い憎いぃぃぃぃぃいいいいいいいいいいいい
いい！！！！！！」

少女の叫びと共に鳥は逃げ出すように飛び立ち、　猫は全身の毛を

これでもかというぐらいに逆立てて威嚇していた。

少年は少女の背中を撫でながら声をかける。

「ホラ・・・見てごらん。これが・・・」

少年の声にあわせるように少女は顔を上げる。

「これが・・・君の過負荷（マイナス）だ。」

プロローグ（後書き）

作者は文才皆無につき駄文です。
また、気まぐれで書いているので投稿は不定期です。
感想、アドバイス等よろしくお願いします
とりあえず今週中にもう一話上げる予定です。

プロローグ2（前書き）

プロローグ2主人公Ｓｉｄｅです。
駄文で短いです。

プロローグ2

「・・・ここどこ？」

目が覚めると僕は幼稚園児ほどの体格になっていた。
たしか昨日は普通に生徒会の雑務をこなして帰ってから宿題してて
だるくなって途中で投げ出して寝ちゃったんだっけ？
しばらく思考を働かせるとある一つの結論にたどり着いた。

「これが俗に言う［転生］て奴か。」

まず夢だと思わないあたりが僕（マイナス）らしい

・・・そうだ自己紹介しておこう

僕は箱庭学園2年1組生徒会執行部所属の音神（おとかみ）蓮馬（はすま）という。

ちなみに禊（みそぎ）曰く「人生の負け組み、人類の劣等種」ようするに僕は
過負荷（マイナス）なのだ。

いやしかしなんで転生なんかしたんだろ？
普通こういうのって死神とか神様とかのミスでお詫びにチート能力
貰って好きなアニメの世界へGO！とかじゃない？
僕はまだ死んでは無いだろうし死神や神様に会ってもいない。
それどころか過負荷（マイナス）の力は残ってるみたいだけど体格幼稚園児並だ
し・・・

「・・・んｰ。ま、いっか♪」

不本意ながらこの第2の人生楽しませてもらおう。

数日後、慣れてきたこの身体で夕方の散歩の帰りに公園を通りかかるとブランコでひとりで遊んでいる女の子を見つけた。
驚くべきことにその子からは僕達に似た雰囲気を感じた。
僕は思わずその子に近づいて声をかけた。

「もう夕方だよ。帰らないの？」

プロローグ2（後書き）

という訳で蓮馬君＝前回の少年です。
べ、別に主人公の名前が思いつかなかった訳じゃないんだからねっ！！／／／

・・・すみませんでした。

それと前回のプロローグは３００人以上の方が見てくれたようです。
この小説を見てくれた方、ありがたいことにお気に入り登録をしてくれた方どうもありがとうございます。
これからも不定期気分更新で行きますが、感想、レビューに辛口評価どうぞよろしくお願いします。

でわでわこの辺で。ありがとうございます。

第一話

なのはｓｉｄｅ

「・・・ん、うぅぅ・・・」

今日は珍しく目覚ましのアラームなしで目が覚めた。
とりあえず今の時間を確認するために、携帯へと目をやる。

「・・・ふぇぇぇえええ！？なんで！？なんでこんな時間なの！？」

いつもなのはが起きるのは５：３０、そしていまは６：４０。

「は、早くしないとはーくんに置いてかれるの！！」

慌てながら制服に着替え、少なめの朝食を口に詰め込んで家を出た。

駆け足で向かうのは学校の反対側である。
走った勢いのまま、角を曲がろうとする。

「うにゃ！」

「うおっ！」

大学生くらいの男性とぶつかってしまった。

「イタタ・・・あ、ごめんなさい。」

なのはそこから急いで立ち去ろうとする。

しかし・・・

「てめぇ！人にぶつかっといてそれだけでいいと思ってんのか！服汚れっちまったぞ！どうしてくれんだ！！」

うわぁ、よりにもよって、面倒くさそうな人とぶつかっちゃったの・・・

「おいっ！聞いてんのかてめぇ！」

ガッ！！

そういって男はなのはの肩を乱暴につかんだ。

！？・・・よし・・・この人・・・潰してやるの・・・

「触らないでよ・・・」

「ひっ！？」

なのはの雰囲気が突然変わったため、男は思わず声を上げ、あとずさる。

「なんで私に触ったの？考えられないの。絶対に許さないの。特別に私の過負荷(マイナス)で潰してあげるから感謝するといいの・・・」

じりっ

なのはが一歩進む。

「っ！」

男は一歩下がる。

　じりっ

「ひっ！」

　じりっ

「ひいぃ！」

　どさっ！

男は足をもつれさせて転ぶ。
しかし、なのはは構わず足を進めながら口を開く。

「私にはキライなものがいくつかあるの・・・」

　じりっ

「1つは私に触るはーくん以外のもの。」

　じりっ

「1つは私とはーくんの間にあるもの。」

　じりっ

「1つは私とはーくんのジャマになるもの。」

じりっ

「とりあえず・・・死ぬといいの。」

そう告げるると男を踏みつけようと足をあげた。

蓮馬side

PiPiPi・・・

「ん、ううううう」

数日ぶりに聞いた目覚ましを止め、僕はベッドの上で伸びをするとあることに気がついた。

「あれ？なのちゃん？」

目覚ましが鳴るといつも添い寝をしている幼馴染の子がいないのだ。

「んー・・・まぁいいか。考えてもしかたないし。」

とりあえず制服に着替えて通学鞄ともってリビングへ降りた。

「おはよう。お姉ちゃん、なのちゃんは？」

そこには僕の姉、音神夏目がいた。

「あぁおはよう。なのはちゃんならまだ来てないわよ。珍しいこともあるのねぇ。」

「ふーん。」

そんな会話をしながら洗面台へと向かう。

洗顔等を済ませ、リビングに戻るとテーブルの上には2人分の朝食と弁当箱3つがあった。

朝食を食べ終え、玄関へと向かう。

「じゃあ、お姉ちゃん先行くね。」

「ちゃんとなのはちゃんを迎えに行くこと。わかった？」

「んー、分かった。」

そう答え、僕はなのちゃんを迎えにいくために、なのちゃんの家へ向かった。

とはいってもなのちゃんの家は通学路の角をひとつ多く曲がったところにあるのでそこまで遠回りにはならない。

そしてその角を曲がるとそこからなのちゃんが大学生程の男性とぶつかって絡まれているのが見えた。

うわぁ、面倒くさそうなことに・・・なってないね。お、形勢逆転。てか今にもふみそうだね。さすがにそれはマズイかも・・・

僕は男性に気づかれないように近づいた。
すると僕に気がついたなのちゃんが音も立てずに一瞬で腕に抱きついてきた。

「んふふ／／／あぁ、はーくんだぁ／／／／／」

「・・・ねぇ、今のどうやったの？」

この子そんなに運動能力高くなかったと思うんだけど・・・

まあいいか。それよりもこの人どうしようか。
驚いてるっぽいけど恐怖のほうがまだ大きいんだろうなぁ。

なのちゃん過負荷使ったみたいだし。

「なのちゃん。前にも言ったけどそうポンポン過負荷を人に使っちゃダメだよ？特になのちゃんの過負荷、精神官能（ブレイク・イン・フィーリング）は後始末ができないんだから。」

「ぶー。でもでもはーくん、コレが私に触ったんだもん。」

「はぁ。もういいから。さて・・・。」

溜息をついてなのちゃんを黙らせ、なのちゃんを障ったものに向き直った。

「ねぇ、お兄さん？たしかに左右確認をしないで角を曲がろうとしたなのちゃんは悪いけど、それはお兄さんも同じじゃないかな？だというのに自分のことを棚に上げて全部なのちゃんのせいにするの

はどうかと思うんだ。いや別にお兄さんが全部悪いとはいってないよ。さっきも言ったけどなのちゃんも悪い。けどそれを全部なのちゃんのせいにするお兄さんはもっと悪いと思うんだよ。ところでどう？悔しくない？悔しくない訳がないよね。こんな自分よりも弱くて小さい女の子に怯えて僕みたいな子供にズタボロ好き勝手いわれてさ。あーイラつくなぁ。あのさぁ、いつまでここにいる気？僕はね、お兄さんみたいな悪い人が大っ嫌いなんだよ。そんな人が目の前に在るのはもとより、同じ町に住んでいるなんて考えるだけで虫唾が走るよ。とは言っても僕も鬼じゃない。この町からいなくなれとは言わないから、さっさと僕の視界から消えてよ。さぁ、早く！」

「う、うわぁぁあああ！！！！」

そう叫びながら男性は走り去っていった・・・

男性ｓｉｄｅ

一体何なんだあのガキ共は！？どうしてあんな迫力あんだよ！！

俺はとにかく走った。早く、速く、あの場所から離れるために。
しばらく走って、大きな道のあるところへ出た。
このあたりまでくれば人通りもあるし大丈夫だろう。

ギィィィイイイ！！！！

そう思った矢先、大きな音とゴムの焦げる臭い、そして大きなト

ラックが目に入った。しかし、それを認識した次の瞬間、俺の目の前が真っ暗になった・・・・・・

第一話（後書き）

お待たせしました。ようやく第1話です。
いやぁ、キャラクター視点て難しいですね。
とりあえず月末に短めのを投稿できるかも。
そういえば来週は夏コミですね。今まったく関係ないですけど。
そうそう、蓮馬君と夏目ちゃんの絵を描いてくれる人を募集します。
詳しくは第2話（月末）に。

では今回はこの辺で。お疲れ様でした。　ノシ

第二話（前書き）

前回の後書きはなんだったのか。

後書きにお知らせがあります。

第二話

「・・・さて、行こうか。なのちゃん。」

「うん！んふふふ／／／」

男性が逝ったのを見届けて、僕はなのちゃんと学校へ向かった。
・・・にしても目障りだなぁこの子。話してる間もずっと腕に抱きついて頬ずりしてくるし・・・。

「なのちゃん、目障りだしウザッたいからはなれてくるないかな？」

「とか言いながら見捨てないからはーくん大好き／／／」

・・・はぁ、もういいや。

そんな感じでなのちゃんとイチャつきながら歩いていると、校門で見知った顔を見つけた。

「あ、アリサちゃん、すずかちゃんおはよー。」

「ん？あぁ、音神になのはじゃない。おはよう。」

「おはよう。音神くん。なのはちゃん。」

そこには僕たちの数少ない友人、アリサ・バニングスと月村すずかがいた。

「あんたたちホント仲いいわね。ていうか、周りの視線とか気にならないわけ？」

「いやいや。殺意嫉妬はむしろウェルカムだけど？」

「んふふふぅ／／／はーくんはーくんはーくん／／／」

「はぁ・・・もういいわよ。面倒くさい・・・。」

そういってアリサちゃんはダルそうに溜息をついていた。
溜息つくと幸せが逃げるよ？

「あんたたちのせいよ！！！」

おおぅ・・・心読まれた。

「ところでなのはちゃん。」

アリサちゃんと入れ替わるようにすずかちゃんが言う。
ニコニコ笑顔で・・・

「いつまで音神くんの腕に引っ付いてるつもり？いい加減、人の目をきにしなきゃダメだよ？」

「うー・・・。」

そう言われてなのちゃんはしぶしぶ腕から離れた。
やっぱりすずかちゃんはコワイなー。

「音神くん、誰がコワイって？」

「イエ、ナンデモナイデス。」

あれか？お嬢様は読心術を習得しないといけない決まりでもあるのか？

他にも他愛もないおしゃべりをしながら教室へ入った。て美少女を3人も独占している訳だから一周囲（男子）の一視線（殺気）がウザいが気にしない。

視線をムシし続け一時間目になった。

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

放課後、僕たちは帰路についていた。

「あんたねぇ、授業ちゃんと聞いてなさいよ。」

「そういうことは僕に勝ってからいいなよ。」

「ぐぅ・・・なんでこんなやつに勝てないのよ・・・。」

まぁ元高2だし。さすがに僕でも小3のテストで満点取れるって。

「まぁもっと勉強することだね。僕はいつでもどこでも全力で相手になるよ。」

「そんなこと微塵も思ってないのに言えちゃうはーくんかっこいい！大好き！！」

「「ははは・・・。」」

そんな乾いた笑いをする2人。

「あ、私たちはこっちだから。」

「じゃあね。音神くん。なのはちゃん、音神くんにベタベタしすぎちゃダメだよ？」

「うぅ・・・善処するの。」

「ははは・・・。じゃあまた明日ね。アリサちゃん。すずかちゃん。」

そういって僕たちは2人と別れた。

「んふふ／／／はーくぅん／／」

少し歩くと僕の腕になのちゃんが抱きついてきた。

「すずかちゃんが言ったこと、もう忘れたの？」

「善処はしたの。3秒くらい。それにここは人通りが少ないから問題ないの。」

なのちゃんは抱きついたまま腕に頬ずりを始めた。

「あのさぁ、暑いし歩きにくいしウザイから離れてくれない？少しは自制心持てよ雌犬。」

「はぁぁ／／はーくんがなのはを罵倒したぁ／／／はーくん、もっとなのはを罵って！もっとなのはを言葉でいじめてぇ！／／／ハァハァ」

なのちゃんが熱っぽい視線で上目遣いをしてきた。

「うるさい。おまえは犬なんだから。犬は犬らしく尻でも振ってろ。」

「はううぅぅ／／／」

「・・・あなたたちなにやってんのよ。」

そんなSMごっこをしているとお姉ちゃんがやってきた。レジ袋を持ってるから夕食の買物にいってくれたのだろう。

「はうっ！お、お姉ちゃん！？」

「あ、お姉ちゃんただいま〜。それ晩ご飯？」

「あぁ、おかえり・・・じゃなくて！なにをしてたのか聞いてんのよ！」

「え？なにって・・・SMごっこだけど？」

「・・・道のど真ん中で？恥ずかしくないの？」

「恥ってなに？おいしいの？」

「はぁ・・・もういいわ。帰りましょう。」

どうやらあきらめたようだ。

ちなみにこのやり取りをしてる間なのちゃんはずっと顔を赤くして口をパクパクさせていた。

『助けて・・・』

「！？」

突然僕の頭の中に直接語りかけてくるように声が聞こえた。

「ねぇはーくん。今のって・・・。」

「うん・・・誰かわからないけど、『助けて』っていってたね。」

「？」

どうやら僕となのちゃんだけに聞こえたようだ。

「はぁ・・・面倒だし、いかなくていいよね？」

「ふええ！？だ、ダメだよ！助けてあげなきゃ！」

「・・・面倒くさいなぁもう。」

僕はしぶしぶその声の主を探し始めた。

「たぶんこの辺だよね？」

なんとなくだがこの辺から声が聞こえたような気がしたのだ。

「うん。たぶん・・・ん？あっ！！」

感覚を頼り、声がしたであろう場所を探していると、なのちゃんが突然声を上げ、茂みの中へと駆け寄った。

「ねぇはーくん・・・この子・・・。」

戻ってきたなのちゃんの手の中には、赤と蒼の宝石を首に下げた怪我をしたイタチのような生き物がいた。

「まさかこれが？」

「わかんないけど、このあたりで弱ってそうなのはこの子だけなの。」

そうか・・・どうしたものか・・・

「ねぇ、なんのことかさっぱりわからないんだけど、とりあえず獣医さんのとこにつれていかない？」

「えー、いいよ面倒くｓ「はーくん？」じゃあ早速いこうか。お姉

ちゃん場所わかる？」

「大丈夫よ。ついてきなさい。」

△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼△▼

イタチを見つけてから数十分後、僕たちは槙原動物病院に来ていた。

「怪我はそんなに深くないみたいだけど、ずいぶん衰弱してるみたいね。きっと、ずっと一人ぼっちだったんじゃないかな？」

「先生ありがとうございます。」

「「ありがとうございます。」」

ぼっちかよｗｗｗとか思いながら僕もなのちゃんとお礼を言う。

「この子・・・フェレット？どこかのペットなのかな？」

「フェレット・・・なのかな？」

お姉ちゃんはこっちに来ながら言う。

「変わった種類だけど・・・それにこの首輪についてるのは・・・宝石？」

そういってお姉ちゃんが宝石に触ろうとするとフェレットもどきが目を覚まし、ある一点を凝視した。

「・・・ねぇ、なんで僕を見るの？」

「えーいいじゃない。かわいいんだし。」

・・・あ、そうだ。

「ねぇフェレットもどきくん・・・いやちゃんかな？まあいいや。僕は君を見つけて「見つけたのは私なの。」・・・君を病院まで連れてきて「連れてきたの私だし。てかはーくん一回捨てようとしたよね？」・・・それなのにお礼のひとつもないの？というわけでその宝石はもらっていくね。」

僕は手際よく二つの宝石をはずした。
フェレットもどきは体力がまだないようでたいした抵抗はしてこなかった。

「え、ちょ、はーくんそれはダメだと「そうだ。なのちゃんにはこの赤いのをあげよう。」はぅ！はーくんが私にプレゼントを・・・はっ！もしかしてこれは婚約指輪のかわり／／／わかったの！結婚指輪にはちゃんとこれをはめてもらうの／／／」

なんかなのちゃん言ってるがほっとこう。

パタッ

しばらく僕を見て、なのちゃんをチラッとみるとフェレットもどき

はまた眠ってしまった。

「あぁ・・・」

お姉ちゃんが心配そうに声を上げた。

「ねぇはーくん。この子うちで飼わない？元の飼い主が出てくるまででいいから。」

「えー・・・いいけどこれは貰っていくよ？あと、世話はお姉ちゃんがやってね。」

「えぇ、任しといて。・・・よかったぁ。」

動物好きのお姉ちゃんとしてはこのまま保健所送りにするのが嫌だったのだろう。お姉ちゃんはホッと胸をなでおろしていた。

「まぁ、しばらく安静にしたほうがいいからとりあえず明日まで預かっておきますね。」

「はい。おねがいします。」

「じゃあ、帰ろうか。」

「うん！んふふ／／／」

こうして僕たちは病院をあとにした。

第二話（後書き）

そういうわけで予定以上に早くできた第二話でした。

この作品がｋｉｎｔｏｋｉ様の「過負荷の少年少女」と酷似しているという指摘がありました。が、これは盗作などは一切しておりません。

お騒がせして申し訳ありませんでした。

これからも応援よろしくお願いします。

人物紹介

小説本文

音神蓮馬
＜容姿＞
年齢９歳
身長１３１ｃｍ
中性的な顔立ちでいつもやる気がなく、根暗な感じの目。
髪は黒く長め。

＜設定＞
転生者だが死んだわけではなく、気づいたらリリなのの世界にいた。
元箱庭学園２年１組生徒会執行部所属。
過負荷（マイナス）だが精神的なところは普通（ノーマル）と大差ない。
常にやる気がなく身内に甘い。
転生後は小学３年。

＜過負荷＞
終焉（ジ・エンド）
触れた相手の精神的な傷をこじ開け、見るものすべてに恐怖するようになる。
又は相手の怒りや憎しみを呼び起こすこともできる。
また、過負荷を行使した相手にマイナスを植えつけることも可能。

高町なのは
基本的には原作と同じ

＜設定＞
幼少時、蓮馬と出会い過負荷を得る。
自分を解放してくれた蓮馬を好いており、又蓮馬を絶対の存在としている。
自分と蓮馬、夏目以外の命はどうでもいいと考えている。

＜過負荷＞
精神官能（ブレイク・イン・フィーリング）
一定範囲の生物の感情を敏感に察知することができる。
また、一度でも触ったものの感情を操作、増大することができる。

音神夏目
＜容姿＞
年齢１４歳
身長１５９ｃｍ
色白の肌と少し釣り上がった目をしている。
髪は黒く、腰まで伸びた髪を真ん中より少し下で纏めている。また、アホ毛がある。

＜設定＞
蓮馬の姉、中学2年。
親がいない音神家の家事全般をこなす。
動物好き。
異常でも過負荷でもない。
なぜか幸運という言葉に縁がない。

というわけで現時点での人物紹介でした。

・・・ぶっちゃけ夏目ちゃんの不幸属性を活用できる気がしない。

ネタバレにならないよう、事あるごとにこういった紹介をします。

前回言った絵についてですが、描いてくれるという聖人君子の方は
ツイッターのダイレクトメールで送ってください。

ＵＲＬ：ｈｔｔｐ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／＃！／ｏｔｏｋ
ａｍｉ＿ｈａｓｕｍａ

では今回はこの辺で　ノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8632u/

過負荷　魔法　崩壊

2011年11月15日07時55分発行